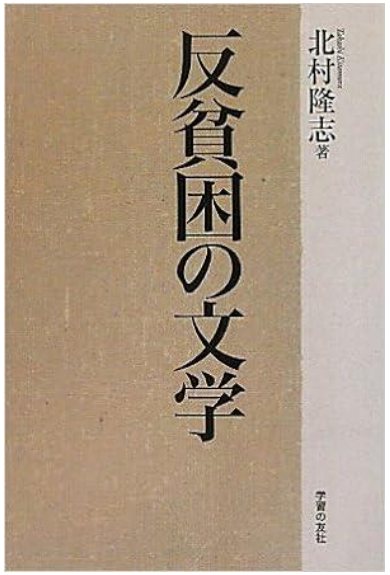
加藤周一
『日本文学史序説』について
―執筆の背景とその特徴

北村隆志（文芸評論家）

はじめに―自己紹介



- きたむら・たかし
- 1963年生まれ　宮城県仙台市出身
- 東京大学教育学部卒
- 私立中学高校の国語科教諭を経て、
  1996年から日本共産党機関紙「しんぶん赤旗」の文芸記者
- 井上ひさし、大江健三郎、加藤周一、鶴見俊輔など取材
- 同人誌『星灯』で「加藤周一論ノート」１～８を連載（2015～22）
- 日本ペンクラブ電子文藝館に拙稿、加藤周一「ある晴れた日に」論、「加藤周一私記」がある
- 著書に『反貧困の文学』『ロスジェネ文学論』（学習の友社）

加藤周一　1919(大正8年)ー2008年(平成20年)

1957年頃医師として勤務中

戦後日本を代表する国際的知識人。少年時代から文学に親しむ。

東京帝国大学医学部を卒業。

1951年ー55年フランス留学。

1960年以降、海外で教鞭をとる。

晩年には「九条の会」の呼びかけ人となり憲法第九条の擁護を訴える。

『日本文学史序説』

『雑種文化論』『羊の歌』

『夕陽妄語』ほか著書多数

晩年の2000年頃

『日本文学史序説』とは

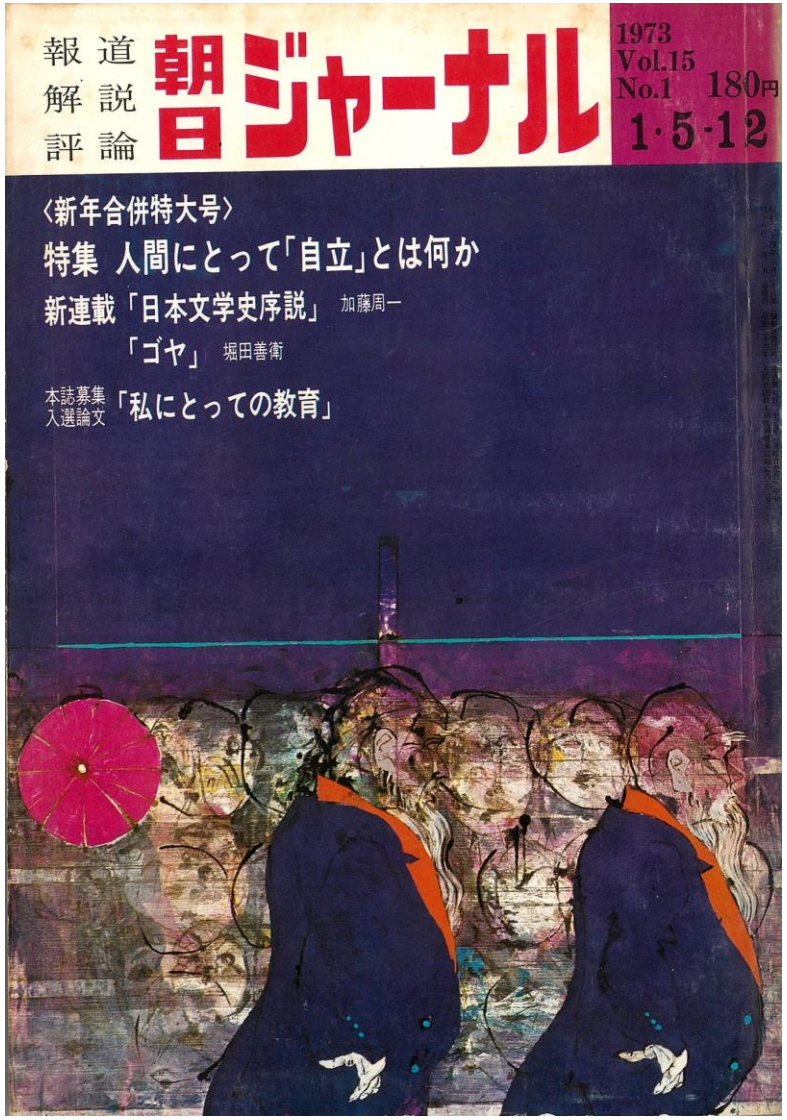
加藤周一の代表的著作。上下巻、約1000ページ。日本文学を古代7世紀の「十七条の憲法」から現代の戦後文学までを書いた通史。個々の作品・作者の卓抜な批評・紹介とともに、文学史全体を一貫した視点でとらえ、変化とともに持続した構造のある有機的な歴史として描いた。

1973年～74年、78年～79年　週刊誌『朝日ジャーナル』連載

〈刊行当時の批評〉

彼は、部分の細かいところに遊ぶという（日本文学の・北村注）長所はそっくり取り入れながら、全体の構造をしっかりと見据えるという、わたしたち日本人にはもっとも不得手とする位置に自分をおいた。加藤文学史の「画期的」ともいえる手柄はまずそこにあるだろう。

（井上ひさし「朝日新聞」文芸時評、1980年8月）



「日本文学史序説」連載第1回を掲載した『朝日ジャーナル』表紙

Ⅰ『日本文学史序説』執筆の二つの動機

1　なぜ日本の知識人は戦争に反対・抵抗できなかったのか。その文化的根源を明らかにする

加藤周一は1919年9月19日生まれ。戦争中は、現在でいえば大学生だった。

1936年４月　第一高等学校理科乙類入学

1940年４月　1年浪人して東京帝国大学医学部入学

1943年９月　医学部を繰り上げ卒業、同大学付属病院で副手として勤務。

1945年8月15日　終戦

日本の戦争を支持する周囲の人々（知識人）に対する疑問といら立ちを募らせた

①（1933年の）開業医の父。日本の侵略戦争という対外政策を支持する一方、軍部の勢力拡大という国内政治に反対していた。

「国際連盟脱退に賛成し、粛軍演説に賛成していたころの父は、その間の関係をどう考えていたのだろうか。（略）おそらく充分に考えぬいてはいなかったのだろうと思う。その頃の父と、太平洋のいくさがはじまった後、つまり四〇年代前半の私とが考え方の上で著しくちがっていた点は、一つしかなかった。私は中学生の頃に、父が事ある毎に食卓で喋った意見の間に相互の連関を辿り難かったことを想い出し、満洲事変以来の多くの現象の全体を、一つの方向への社会の発展として理解しようと試みたのである。私の理解は幼稚だったにちがいない。しかしそれ自身のなかに矛盾を含むものではなかった。私は軍国主義を嫌い、狂信的な愛国主義者の宣伝をつまらぬ時代錯誤だと考えながら、同時に大日本帝国政府の戦争目的を肯定するということはなかった。」

（加藤周一『羊の歌―わが回想』「二・二六事件」1966～67年発表）

②（1938年）人気作家の横光利一を一高に招いた講演会。その後の座談会で加藤は横光と激論になった。

「駒場の外の世界では、そのとき、マルクス主義者の弾圧に、自由主義的な学者の教職追放がつづき、流行の論客たちが、賑かに、わかりにくい言葉で「戴冠詩人の御一人者」とか、「殉国精神」とか、「信仰の無償性」とかいうことを叫びたてていたのである。京都の哲学者と雑誌「文学界」と文学者たちは、もう少し静かな言葉で、もう少しもっともらしく、大日本帝国が中国を征伐するのには崇高な目的があるはずだといい、西洋の近代文化は行きづまっているから、日本人である我々が「近代」を超えた文化を建設したいものだなどといっていた。とめどもなく進んでゆく軍国主義的風潮のなかで、寮の内側と外側には、大きなくいちがいか生じようとしていた。そのくいちがいは、その頃「小説の神様」といわれていた横光利一氏が第一高等学校で講演するのに及んで、爆発したのである。」

（加藤周一『羊の歌―わが回想』「二・二六事件」）

②（1938年）人気作家の横光利一を一高に招いた講演会。その後の座談会で加藤は横光と激論になった。（続き）

中村真一郎『増補　戦後文学の回想』から

「この会（一高国文学会）が、ある時、横光利一を呼んで座談会をやった。それまで日本の本格小説の代表者として尊敬されていた横光氏は、時代の移り変りに従って『旅愁』のなかで、独自の東洋主義、超国家主義を展開しはじめていた。それが私たちを憤激させていたので、この座談会ははなはだ失礼極まることなのだが、一種の査問会のようなことになった。「西洋には論理があり、東洋には人情がある」という横光氏の意見に対して、加藤周一や白井健三郎は、論理は普遍的であり、義理人情はわが国の徳川時代の道徳、つまり一地域、一時代のモラルに過ぎないと言って、激しく攻撃した。

横光氏は激怒して、帽子をほうりだしたまま席をけって帰って行った。」

③（1945年）加藤は「沖縄もまた占領されるだろう」と言って、日本の勝利を信じて疑わない若い医師と論争になる。

「しかし、それにしても、例えば火傷の治療法については綿密な論理を操り整然と語ることのできる男が、何故沖縄の運命については簡単な論理さえも冷静に辿ることができないのだろう？　医学には詳しいが、戦局には知識がないからか。しかし、客観的な判断と自己の希望との不手際な混同は、知識の不足によるものだろうか。例えば新聞の記事にしても、五万トンの戦艦というような噂にしても、外科学会雑誌の報告は慎重に吟味した後でなければ決してそのまま信用しない岡田〔同僚の外科医〕が、何故新聞の記事は無造作にその まま本当のこととして話すのか、理解することができない。同じ人間が、あるときには論理的であり、あるときには非論理的である。あるときには慎重であり、あるときには軽率を極めるというのは、一体どういうことか。」

（加藤周一　小説『ある晴れた日に』1949年発表）

④1946年、加藤は戦後第一声ともいえる「新しき星菫派に就いて」（『1946　文学的考察』所収）で、若い知識青年、知識人の卵を次のように批判した。これは知識人全体への批判でもあった

「戦争の世代は、星菫派である。」

「星菫派」とは、「寸毫の良心の呵責を感じることなしに、最も狂信的な好戦主義から平和主義に変り得る青年」、「総てのよき芸術にかなり深い理解を示し」「かなりの本を読み、相当洗練された感覚と論理を持ちながら、凡そ重大な歴史的社会的現象に対し新聞記事を繰り返す以外一片の批判もなし得ない青年」のことである。

星菫派が持つのは「現実に対して無力な哲学、歴史を判断することの出来ない思想」、「要するに星菫派は無力であるのみならず無学である。」

「筆者は衷心からその流行の中絶と、彼らが理性の道へかえることを希望している。」

⑤一方、戦争に抵抗・非協力を貫いた人たち、特に社会主義者・共産主義者を高く評価した。戦争反対を貫いた人たちと、戦争を支持・協力した大多数の知識人との違いはどこにあるのかが、加藤の問題意識の出発点となる。

「ひとりゲーノのみならず、戦争に対し勇敢な反対を続けた者は、ことごとく広い意味での社会主義者であり、この戦争の時代にユマニテを正しく代表し得たものは、すべて、洋の東西を問わず、社会主義者の他にはなかった。この事実は、例を挙げるまでもなく実に明白であって、日本の場合には殊に著しい」　（「ジャン・ゲノに就いて」『近代文学』1946年9月）

「宮本（顕治・百合子）夫妻に代表される共産主義者は、その立場を、獄中・または獄外において、命がけで貫いた」（「戦争と知識人」1959年）

日本人の意識構造に、国家や所属集団を超える超越的世界観がないことが、大多数の知識人の戦争協力の内面的理由だと考えた

論文「戦争と知識人」1959年9月発表

「思想上の戦争反対が貫かれなかったのは（中略）天皇・民族・国家をひとまとめにした「日本」を超えるどんな価値概念も真理概念もなかったからだ」「実生活と離れた思想は、実生活に対し、超越的な価値概念も、真理概念も、つくりだすにいたらなかった。それこそ知識人の戦争協力という事実の内側の構造であった」

「日本」を超える価値を信じきれなかった大きな理由として「その思想またはイデオロギーの外来性」をあげている。

「戦争と知識人」の最後で、戦争に反対しきれなかった大きな原因は「日本の知識人の精神構造の伝統的な型であって、その型をあきらかにするためには、昔にさかのぼらなければならない。昔とは『古事記』の昔である」と書いた。古代以来の日本文化に立ち返って、日本の「神ながらの道」の精神構造を解明することを、今後の課題として宣言した。

『日本文学史序説』執筆の二つの動機

２、「西洋見物」で発見した、文化の持続性と、日本文化の雑種性を全面的に展開・検証するため

1951年11月　フランス政府半給費留学生（医学）として渡仏
1955年３月　帰国
1958年９月　医業を廃し、文筆業に専念
1960年10月　カナダのブリティッシュ・コロンビア大学准教授に（～69年）

「一九四五年の秋に、戦後日本の社会へ向って出発した私は、五一年の秋に、西洋見物に出かけた。これが私の生涯における第二の出発になった。」（『続羊の歌』「第二の出発」1967年発表）

西洋見物は加藤周一をどう変えたのか

①ヨーロッパの中世を発見。特に教会のゴシック建築など造形美術。中世から現代の文化の持続性に思い至った。

「「中世」は私をおどろかせた。（略）ノートル・ダムの寺院と中世の様式が、パリの景観の全体にとって、まさかそれほど決定的な要素であろうとは、その街を自分の眼でみるまで、想像もしていなかった。しかもそれは建築だけのことではなかった。やがて私は、フランスの文化の中世以来連続して今日に到っている事情は、日本の文化が鎌倉時代以来連続して今日に及んでいる事情に似ていると考えるようになった」

『続羊の歌』「中世」

②日本文化研究への方向転換

「日本の外へ出て、日本の文学のことを考えると、今の日本文学が、古い伝統からはなれて西洋を手本にしていることが、大へん奇妙にみえる。（中略）われわれの伝統のなかには、もしそのなかに入ればまだそこから抽きだせるもの、そこから出発して発展させることのできるものが沢山ありそうである。少なくとも私はそう思うし、今までそれを充分にしてこなかったのは怠惰であったという印象をうちけすことができない。」

「西洋見物の途中で考えた日本文学」1954年

「私は西洋見物の途中で日本文化のことを考え、日本人は西洋のことを研究するよりも日本のことを研究し、その研究から仕事をすすめていった方が学問芸術の上で生産的になるだろうと考えた（中略）少くとも私自身の場合には怠慢であったと考えた」

「日本文化の雑種性」1955年

③雑種文化論の提唱

英仏の文化が純粋種であるのに対し、近代の日本文化は日本と西洋の「二つの要素が深いところで絡んでいて、どちらも抜き難い」「雑種の文化の典型ではないか」。

そして、西洋の影響を排して日本の伝統文化への回帰を求める国民主義も、逆に、日本の西洋化一辺倒の近代主義も、誤った純粋化運動だと退けた。結論として「純粋種に対する劣等感」を捨てて、「文化の雑種性そのものに積極的な意味をみとめ、それをそのまま生かしてゆくときにどういう可能性があるか」を追求することが日本の課題だと提起した。　「日本文化の雑種性」1955年

しかし理論的には、この論文のなかでのように文化の純粋種の例を近代の英仏にとるよりは、一九世紀末までの中国にとった方が適切であったかもしれない。はるかに長い期間にわたって、中国の文化は自発的 sui generis　であった。一九世紀の末に、雑種の日本文化が、その創造力において、純粋の中国文化よりも、貧しかったと想像する理由はない。　『加藤周一著作集』での「追記」1979年

「西洋での生活は、私の西洋文化のみ方を変えたが、西洋文化のみ方の変化は、同時に日本文化のみ方の変化をも意味しないわけにいかなかった。（略）近代日本の文化が、（古来の醇風美俗と西洋種の学芸技術との混った）その意味で「雑種文化」であるという考えは、少しも新しいものではない。しかし雑種が純粋種よりもその可能性において劣っているとはかぎらず、雑種のままで元気よくやりましょう、という気構えだけは、少くとも私にとって新しいものであった。」『続羊の歌』「格物致知」

「私は加藤君のこの主張に全く啓発された。日本文化の雑種性を説いたのは加藤君が始めではない。しかしそれの積極性を認め、そこからの出発をこのように綿密に、実証的に、また自信をもって主張したのは加藤君が始めではないかと思う」フランス文学者の河盛好蔵『新選現代日本文学全集三四』解説、1959年

④近代と前近代（江戸期以前）の日本文化の持続性

「明治以前と以後の文学（または漠然と文化）が断絶していて、そこに一貫した伝統を考えることができない」という通説に疑義を示す。中国を明治以前の、西洋を明治以降の、それぞれの日本文化の本店とみなしたとしても「支店の側にもいくらか独立性があるとすれば、本店の断絶すなわち支店の断絶とはいえない。断絶の説はその根拠を失うだろう」と説く。

いわゆる「断絶」の問題を検討するには、まず「日本的なもの」の検討からはじめなければならない。私はまずそれを文学芸術について検討し、そのつぎに文学芸術の背後に考えられる意識一般について検討するだろう。（中略）少なくとも従来の通念としてのいわゆる「日本的なもの」が必ずしもほんとうに日本的なものを代表しているのではないという事実だけははっきりさせたいと思う。

「果して「断絶」はあるか」1956年

⑤「日本的なものとは何か」を定式化

日本文化の特色は「わび、さび、もののあわれ」だという通説を退ける。これは国中の床の間にあふれた、粗製乱造の掛軸をもとにした俗説にすぎない。雪舟の代表作は「セザンヌの風景画の分析的な面の構成を思わせ」「わび、さび」ではない。「鎌倉初期の木彫は、その後、彫刻による個性の写実的表現という点で、未曽有の水準に達した」。光琳の「その豊饒、その豪華、その純粋に感覚的よろこびのあふれてくるところにこそ、「日本」を感じる」と。それらに「わび、さび、もののあわれ」はない。そうではなく、写実性と装飾性、感覚的な美の見事さこそ、「日本的なもの」だと書いた。

『万葉集』以来の詩歌や『源氏物語』『今昔物語』に共通の日本文学の特徴「想像力よりも経験の文学」「怪異の世界よりは日常的世界に執する」「形而上学的であるよりも感覚的な文学であって、人生哲学の深さよりは視覚的描写の生彩と自然感の洗練に勝るもの」。

「写実性」「感覚性」「日常性」「経験性」の根底にある意識構造。「結論は要するに仏教渡来以前の原始宗教的世界には、超越的な彼岸思想がなかった。仏教、儒教、および西洋文化の影響も、その点においては、日本人の意識をけっきょく変革しなかったということに尽きる」

加藤周一が見出した「日本的なもの」の核心は「超越的な彼岸思想がなかった」こと

同前「果たして「断絶」はあるか」1956年

Ⅱ『日本文学史序説』の五つの特徴

１、「文学」の概念の拡張

詩歌、戯曲、物語・小説、随筆中心の狭義の「文学」でなく、仏教・儒学・キリスト教などの思想書、歴史書、大衆文芸を含む広義の「文学」

２、「日本文学」の拡張

日本語の作品だけでなく、シナ語でかかれた漢文・漢詩、日本化された漢文で書かれた作品まで含める。

（平安時代の空海、菅原道真。鎌倉時代の法然、日蓮、江戸時代の学者らは漢文で書いた）

「文学理論を除く理論的作品、漢文による作品、大衆文学（室町時代の仮名草子、徳川時代の川柳、雑排、滑稽本、近代の時代小説など）」を等閑視してきた。

「従来の文学史の叙述が以上のような欠陥を持つために、日本文学は本来の姿に反して思想的実質に乏しいものとみなされがちである。元禄期の文学が、芭蕉・西鶴・近松によって代表され、白石・徂徠を含まぬものとすれば、思想的内容に乏しいのは、わかりきったことである。一七世紀の日本文学が、同時代のフランス文学よりも、思想的に貧しいのではなく、白石・徂徠を無視する日本の文学史家の方法が、デカルト・パスカルを特筆大書するフランスの文学史家の方法と違うのである」「さらにこのような書き方は、日本文学が民衆の生活感情を受け止め表現する力に乏しかったとの印象を与えかねない」

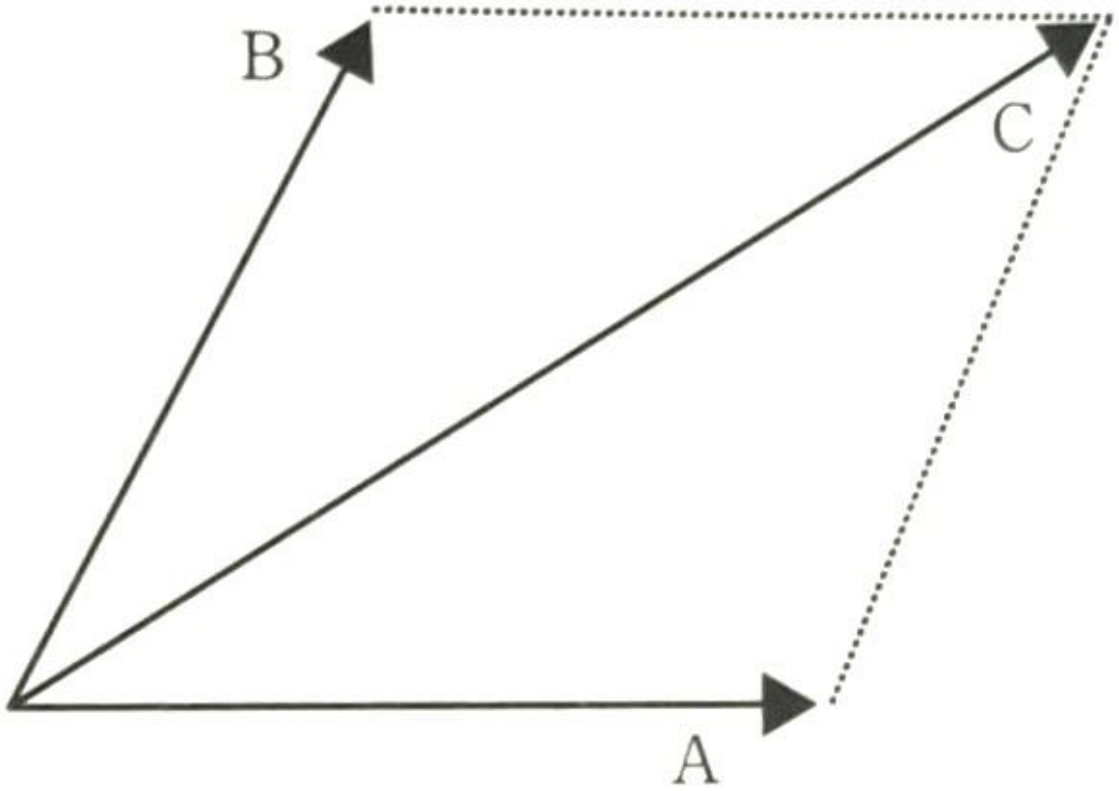
「日本文学史の方法論への試み」1971

３、文学作品の世界観・思想の系譜を分析
＝精神史・思想史であり、日本文化論である

「日本人の世界観の歴史的な変遷は、多くの外来思想の浸透によってよりも、むしろ土着の世界観の執拗な持続と、そのために繰り返された外来の体系の「日本化」によって特徴づけられる」

『日本文学史序説』

「序章　日本文学の特徴について―世界観的背景」



日本に入ってきた外来思想ベクトルBは、土着世界観ベクトルAの影響を受けて、「日本化された」外来思想ベクトルCに変化する。変化（日本化）は必ず一定の方向であり、逆の例はない。

①外来思想　＝包括的・抽象的・（彼岸的）＝超越的原理と普遍的価値を持つ

土着世界観＝個別的・具体的・此岸（現世）的＝超越的原理・超越的価値なし

②さらに加藤は日本文学の特徴として「作家がその属する集団によく組み込まれていた」ことをあげる。「良く組み込まれた作家は、その社会の価値の体系を、批判することはできないし、批判を通じて超越することはできない。しかし（略）感覚を研ぎ澄まし、表現を洗練することはできる」

③日本文学に通底する現在主義＝「いまここ」主義も明らかになっていく。

日本文化の特徴①現世主義②現在主義③集団主義

４、どの「階級」の文学なのかを意識

・マルクス主義を踏まえた文学史。特に被支配階級（民衆、大衆）の意識・表現に目を注いだ

・書き手とともに、受け手（読み手）の「階級」も重視。

例：貴族社会が生んだ『源氏物語』に、民衆的な『今昔物語』を対置する

『今昔物語』（12世紀前半＝平安時代末＝に成立した説話集）

「宮廷と都の外には、いかなる生活があり、いかなる信条が生きていたか。貴族以外の人々、地方豪族や、武士や、農漁工商や餌取（えとり）、丐匂（かたい＝こじき）には、いかなる話があったのか。それは平安朝貴族文学が決して語らなかった題材であり、ただ『今昔物語』が描いた世界である」「『今昔物語』の編者は大衆ではない。しかし大衆的な聞き手を考慮しながら大衆的な世界を語ろうとした」

例：『平家物語』の個性的行動的人物たちは聞き手の民衆の要望から

（13世紀初め＝鎌倉時代初期）

「（貴族の作者の書いた）『平家物語』は、なぜこのような人物を描き、戦う男たち、殊に東国武士の行動を活写することができたのか。聞き手が、もはや宮廷の女房や貴族ではなく、おそらくは文盲を含む大衆であり、彼らがそれを望んだからとしか考えられない」

例：14・15世紀に完成した猿楽という演劇（能と狂言）

「大衆的な見世物であった「猿楽」を、一時代の文化の頂点まで洗練したのは、貴族や武士上層から出た知識人ではなく、大衆から出た藝術家であった」
狂言（滑稽な会話劇）では「日常生活の心理の観察が鋭く、小さな笑劇としての構成が見事であった。このような「狂言」の世界こそは、『今昔物語』（「本朝部世俗」）以来の土着世界観が、大衆的な観客の立会いのもとで、内容を豊富にし、形式を様式化するとき、どういう方向へ発展し得るかを示したのである」

例：幕末に頻発した農民一揆。

現在の福島県での一揆（1866年）の指導者の言説全文

「やあやあ者共、火の用心を第一にせよ。米穀は打ちちらすな。質物は決して手を懸けまじ。質は諸人の物成るぞ。此働きは私欲にあらず。是は万人のため成るぞ。此家の道具は皆悉く打こわせ。猫のわんでも残すな」

「その断片的な言葉が、一九世紀の日本の農民の文学である。あるいは農民の文学の一端である。彼らの言説の大部分は、それがどれほど力強く、どれほど感動的で、どれほど明晰であっても、大衆の叫びと打こわしの騒音のなかに、消えていったのあろう。(略)しかしその一班をもってさえも、農民の言説が、武士知識人や町人のそれから全くちがっていたろうことを、察するのには、充分である」

5、外国人にもわかるように書いた

・カナダやドイツの大学での日本文学史の講義がもと
　ノート・メモは外国語（英仏独）も多用している
　立命館大学「加藤周一文庫デジタルアーカイブ」で読める

例：英語で禅を紹介した鈴木大拙について「重要なのは、彼が何語で書いたかということではなく、本来何語でも書き得るように考えたということであろう」。この指摘は加藤自身にも当てはまる。

・西洋文学の例を随所で比較参照する

Ⅲ『日本文学史序説』をどう読むか
ー現在に生きるいくつかのポイント

・戦争に反対しなかった日本知識人の弱点、その歴史的文化的原因の指摘

「万葉集」の軍国主義権力による曲解、「神皇正統記」のデマゴギー、キリスト教棄教者の詭弁、『葉隠』の時代錯誤など

・反権力を貫いた反骨の系譜の発掘

親鸞・日蓮など鎌倉仏教、仏性院日奥、大塩平八郎、農民一揆、内村鑑三、河上肇、石川啄木、中野重治・宮本百合子らマルクス主義者…

・土着世界観（その根源の大衆の意識）の積極面・創造性の再評価

『今昔物語』の活力、新井白石の合理主義、式亭三馬の似非知識人への風刺偶像破壊

・通説にとらわれず、自分の眼で見たもの、確認したものから考える

　例　日本人の「自然好き」を否定。紀貫之の詠んだ花は「おどろくなかれ、六種類しかない（さくら、梅、山吹、をみなへし、ふぢばかま、菊）」

・筋道だった系統的歴史叙述と、卓抜な作品・作家評価との統一。（時に独断と見えても、思い切った断定が大きな魅力である）**「文学作品」としての文学史**

　作品理解の良き導きとなる、的確で簡潔な引用の豊富さ

例「井原西鶴（一六四二―一六九三）は、町人の、日常生活の、殊に経済的な面を含めての現実を、そのものとして正確に描写し、日本のみならず、中国や西洋の小説の歴史にも先例を見出し難い最初の「リアリズム」小説を作った」

「芭蕉は、その発句（俳句）に、古代歌謡以来の日本語の歌の全体を、つまるところ日本の土着世界観の要点を、要約し、徹底させたということができる」

河上肇の「大逆事件」論の紹介

（なぜ無政府主義者が処刑されたのか）日本人にとっての「最大至高の価値」は国家であり、日本人のもっともおそれるのは「此の国家至上主義の破壊」に他ならないからである。この議論を推して河上は「日本人は国家に没我すれども国家以上のものに没我する能はず」といい、「ゆえに学者は其真理を国家に犠牲にし、僧侶は其信仰を国家に犠牲にす。是れ即ち日本に大思想家出でず大宗教家出でざる所以なり」とつづけた（中略）。死せる幸徳は、生ける河上にそこまで書かせたというべきか。

ご清聴ありがとうございました